

▼松浦友久氏はこのように説明されている。

「羊祜」が守となった地（襄陽）のことを、「湖北省の西北部、漢江のほとりに位置し、漢代以降南北（華北と華中）の勢力が激突する地点として、あるいはまた南北を結ぶ交通の要所として重視された。さらには、また漢江の水運を利用した物資の集散地たる商港として南朝以来繁栄し、遊楽の都市として知られた」と説明されている。（『漢詩の事典』より）。

▼清藤鶴美氏は、この二句について「道真是愛慕する京の山々を硯山にたとえ、西陲の筑紫を燕になぞらえたのである」と付記されている。（『菅家の文章』より）。

この二句には、どんなに自分の魂が京都を恋しく望んでも、遺骨は、そこからはるかに離れたこの西の筑紫に埋められるであろうという、いかんともしがたい深い絶望感が感じられる。

補説②

○199句～200句「敘意千言裏、何人一可憐」の二句に込められた道真の心情について

▼この終わりの二句からも、今の自分の心情を共有できるような友を持ちえない心のうちを二百句に述べたもので、そこには誰にもわかってもらえないどん底の絶望感と孤独感がひしひしと伝わってくる。

（井原 和世）